



北海道神経難病研究センター
平成29年度活動報告

第7号

(平成29年4月～平成30年3月)

北海道神経難病研究センター

目 次

1. 平成 29 年度活動報告について
2. 北海道神経難病研究センターの概要
3. 平成 29 年度活動報告
 - (1) 神経難病臨床研究部門
 - (2) 神経難病リハビリテーション部門
 - (3) 神経難病看護・ケア部門
 - (4) 神経難病医療相談・福祉支援部門
 - (5) 神経難病緩和医療研究会
4. 北海道神経難病研究センター主催講演会
 - (1) 第 6 回北海道神経難病リハビリテーション研究会講演会
 - (2) 第 5 回神経難病緩和医療研究会講演会

1 平成29年度活動報告について

北海道神経難病研究センターは、平成23年7月に神経難病に関する病態解明および学術的治療研究、看護をはじめとしたコメディカルによる多角的臨床研究、神経難病患者を中心とした医療環境に対する調査・研究を行い、これら神経難病に対する総合的かつ包括的な研究を推進し、北海道における神経難病医療と環境の発展を図ることを目的に設立した。

研究センター全体としての活動は、平成23年度活動報告、平成24年度活動報告、平成25年度活動報告、平成26年度活動報告、平成27年度活動報告、平成28年度活動報告に引き続き、平成29年4月～平成30年3月までの活動を平成29年度活動報告としてまとめました。

各部門での活動のほか、第6回北海道神経難病リハビリテーション研究会講演会、第5回神経難病緩和医療研究会講演会を報告した。

北海道神経難病研究センターの各部門での活動が徐々に活発となり、新しい神経難病医療社会の構築をめざし真摯に研究・支援に邁進したいと存じます。

これまでの多方面の方々からご支援賜りましたことを深謝申し上げますとともに、今後とも引き続きご指導、ご鞭撻下さりますよう、お願い致します。

平成30年4月

専務理事・センター長 森若文雄
代表理事 濱田晋輔

3 平成29年度活動状況：

(1) 神経難病臨床研究部門

神経難病臨床研究部門は、医務部が各部と連携して活動している。新しい医療技術の導入、教育活動、業績にわけて報告する。

1. 新たな医療技術の導入と学会発表

2016年11月から導入したロボットスーツ Hybrid Assistive Limb (HAL®)に関し、2017年4月からは保険適応外疾患に関し倫理委員会の承認を得て臨床研究を開始した。

2. 教育活動 研修受け入れ

北海道大学神経内科からの医学部6年生の研修を、手稲溪仁会病院からの初期研修を引き受けており、当院の特徴を生かし、多職種による講義指導を企画している。また今年度は武田薬品のMR研修を受け入れた。

【社会活動】

<検診・医療班派遣>

1. 本間早苗, 野崎ももこ, 清水恵美子：第44回難病患者・障害者と家族の全道集会(札幌大会)(医療班), 北海道難病連, かでる2・7(札幌), 2017.8.5-6
2. 本間早苗：平成29年度難病及び小児慢性特定疾病に関する指定医研修(第1回), 北海道保健福祉部健康安全局地域保健課, 道庁別館, 2017.4.23
3. 本間早苗：平成29年度岩内保健所在宅療養支援計画策定・評価事業, 岩内保健所, 神恵内村役場, 2017.6.22
4. 濱田晋輔：平成29年度神経難病患者訪問検診～礼文町、利尻町、利尻富士町、稚内保健所利尻支所。2017.9.13-15

<医療講演会・シンポジウム>

1. 野中道夫：第8回大分難病研究会「ALSの医療において今できることはなにか」, 大分医師会館, 2017.7.1
2. 野中道夫：「高齢者の諸症状に補剤を使ってみる」, 帯広漢方研究会学術講演会, ホテル日航ノースランド帯広, 2017.7.14
3. 野中道夫：「高齢者の諸症状に対する漢方治療：パーキンソン病の治療から学ぶ」北海道老年病漢方研究会, ホテルさっぽろ文芸館, 2017.8.26

4. 本間早苗:パーキンソン病の～病態と治療について～, 難病研修会 (西区保健福祉部), 西区保健センター, 2017.10.13
5. 野中道夫:筋萎縮性側索硬化症の医療において今できることはなにか, 第6回北海道神経難病リハビリテーション研究会講演会, 西野学園札幌医学技術福祉歯科専門学校, 2017.12.17
6. 野中道夫:高齢者の諸症状に対する漢方治療, 十勝漢方研究会, とかち池田地域医療センター, 2018.1.19
7. 野中道夫:高齢者の諸症状に対する漢方治療:パーキンソン病の治療から学ぶ, 桑園薬剤師漢方セミナー, 2018.1.30
8. 本間早苗:平成29年度難病及び小児慢性特定疾患病に関する指定医研修「パーキンソン病について」, 北海道保健福祉部健康安全局地域保健課, 道庁 (札幌), 2018.2.4
9. 野中道夫:「筋萎縮性側索硬化症:ALSの医療において今できることはなにか」, 千歳市神経難病学習会, 千歳市民文化センター, 2018.3.13

【学会報告】

<全国学会発表>

野中道夫:HALを使用したサイバニクス治療により歩行能力が向上した球脊髄性筋萎縮症の67歳男性例, 第36回日本神経治療学会, ソニックシティ (パレスホテル大宮), 2017.11.16

<地方会発表>

野中道夫:「HALを使用したサイバニクス治療により歩行能力が向上した球脊髄性筋萎縮症の67歳男性例」, 第101回日本神経学会北海道地方会, 札幌医科大学記念ホール. 2017.9.2

【研究業績】

著書・総論

野中道夫:呼吸困難にはどのように対応しますか?. 神経内科 Clinical Questions & Pearls「運動ニューロン疾患」, 中外医学社 (東京), 2017:286-293

野中道夫:排痰補助装置による Mouthpiece Ventilation. 難病と在宅ケア, 2017; Vol. 23, No4

野中道夫：筋萎縮性側索硬化症の医療において今できることはなにか。 札医通信. 201 No602.

森若文雄監修、内田 学編集：姿勢から介入する摂食嚥下 脳卒中患者のリハビリテーション、メジカルビュー社（東京）, 2017

原著

Yaguchi H, Takeuchi A, Horiuchi A, Takahashi I, Shirai S, Akimoto S, Satoh K, Moriwaka F, Yabe I, Sasaki H : Amyotrophic lateral sclerosis with frontotemporal dementia (ALS-FTD) syndrome as a phenotype of Creutzfeldt-Jakob disease (CJD)? A case report. J Neurol Sci 2017 15 : 444-446

Tamura I, Takei A, Hamada S, Nonaka M, Kurosaki Y, Moriwaka F : Cognitive dysfunction in patients with spinocerebellar ataxia type 6. J Neurol 2017 264((2):260-267

Yaguchi H, Takeuchi A, Horiuchi A, Takahashi I, Shirai S, Akimoto S, Satoh K, Moriwaka F, Yabe I, Sasaki H : Reply to: The Letter to be published with the Letter, Amyotrophic lateral sclerosis with frontotemporal dementia (ALS-FTD) syndrome as a phenotype of Creutzfeldt-Jakob disease (CJD)? A case report. J Neurol Sci 2017 15:490-491

Wakerley BR, Hamada S, Tashiro K, Moriwaka F, Yuki N :Overlap of acute mydriasis and acute pharyngeal weakness associated with anti-GQ1b antibodies. Muscle Nerve 2018 57(1) E94-E95

(2) 神経難病リハビリテーション部門

ケースカンファレンス、座談会、勉強会を定期的を開催し、新しいプロジェクトとして「わくわくりハビリテーション」と「HAL®治療」を進めた。

① ケースカンファレンス

ケースカンファレンス	月 日	テーマ	発表者	参加人数
第11回	2017. 6. 29	再発性脊髄炎の予後予測に難渋した一症例 ～急性期、回復期の関わり～	PT 真屋 大気 市立札幌病院 PT 鳥羽 悠斗 北祐会神経内科病院	37名
第12回	2017. 8. 29	これあった方が良くと思いますよ - ペーシングボードを日常生活に取り入れるためのアプローチ-	OT 有馬 恭平 北祐会神経内科病院	49名
第13回	2017. 10. 27	パーキンソン病患者さんときめきのあ る 楽しいリハビリテーションやってみた	PT 大橋 哲朗 OT 徳永 典子 札幌パーキンソンMS 神経内科クリニック	38名

② 座談会

座談会	月 日	テーマ	参加人数
第20回	2017. 05. 26	ケアマネとリハビリの切っても切れない関係①	66名
第21回	2017. 07. 28	ケアマネとリハビリの切っても切れない関係②	44名
第22回	2017. 09. 22	ケアマネとリハビリの切っても切れない関係③	36名
第23回	2017. 11. 30	同世代で語り合おう	45名
第24回	2018. 02. 22	同世代で語り合おう part II	47名

③勉強会

	タイトル	開催日	発表者	参加数	備考
1	予演会	2017. 4. 12	飯島健介	41	『歩行支援型ロボット使用により歩行能力向上を認めた球脊髄性筋萎縮症患者の1症例』
2	症例検討会①	2017. 4. 13	鳥羽悠斗 本間冬真	37	『急速なADL低下を来した脊髄炎患者に対して移動方法確立に向けて介入した症例』 『就労と自主練習の継続を希望するパーキンソン病患者の生活リズムに着目し、自主練習般化を目指した介入』
3	リサーチカンファレンス①	2017. 4. 20	金村智紀 堀田糸子 小林阿佑美 庄司梨沙	35	『リハビリテーションとボツリヌス療法の併用により動作改善を認めた脊髄小脳変性症患者の一症例』 その他進捗状況報告
4	症例検討会②	2017. 4. 22	西海颯一郎 小室祐子 金村智紀	42	『片手歩行時に前、側方へのふらつきを自制し、自宅内活動量増大に向けてアプローチしたSCD症例』『更衣動作改善を目指したパーキンソン病の一症例』 『下肢の疼痛により低下したADLの再獲得に向け早期離床を目指したパーキンソン病患者の一症例』
5	症例検討会③	2017. 5. 12	堀田糸子 庄子梨紗 小林阿佑美	43	『難治性の摂食・嚥下障害に対し、代償的アプローチをチームで検討したミオパチー症例』 『更衣に過介助を受けていた進行性核上性麻痺患者に対し、成功体験を繰り返すことで介助量の軽減を図った一症例』

					『慢性的な疼痛により活動量が低下したPD症例に対し姿勢改善による疼痛緩和を目指して』
6	リサーチ カンファ レンス②	2017. 5. 18	堀田糸子 小林阿佑美	38	『呼吸不全を伴う筋萎縮性側索硬化症患者に対するHALを使用したサイバニクス治療の経験』 『神経難病患者に対するAACの導入について～当院での取り組み～(第2報)』
7	症例検討 会④	2017. 5. 30	飯島健介 楠山道子 馬道健弘	38	『急性疾患により摂食・嚥下障害憎悪を呈したPD患者へ、段階的嚥下訓練を併用し自宅復帰を目指した症例』 『外出機会再獲得に向け首下がり改善を図ったPD患者の一症例』 『右上下肢優位のパーキンソン症候群を呈する右上腕骨折後の患者の食事動作支援を通して、家事動作の拡大まで活動・参加が促された一例』
8	症例検討 会⑤	2017. 6. 5	清水 瞳	39	『無声音化、嗄声の影響により主介護者との会話に不便さを感じた多系統萎縮症患者に対して、嗄声軽減を目指した介入』
9	院内研修 会	2017. 6. 14	須貝英理 佐藤高大	50	『第17回摂食嚥下リハビリテーション研修会 北海道地区』
10	リサーチ カンファ レンス③	2017. 6. 15	那須和佳奈 有馬恭平 本田秀晃 須貝英理 坂野康介	37	札幌市病院学会に向けての発表準備・報告 「荷重移動能力の定量化方法の考案に関する研究」
11	講義	2017. 6. 22	望月久	55	『運動制御における小脳と大脳基底核のはたらき』
12	予演会	2017. 7. 3	小林阿佑美	38	『呼吸不全を伴う筋萎縮性側索硬化症患者に対するHAL®を使用したサイバニ

					クス治療の経験』
13	症例検討会⑥	2017. 7. 10	有馬恭平 那須和佳奈	36	『階段昇降が困難となっているPD患者への関わり』 『廃用症候群により、意欲減退を呈したパーキンソン病患者に対し、興味のある活動を提供する事で、離床機会の確保を図った一症例』
14	リサーチカンファレンス④	2017. 7. 20	那須和佳奈 有馬恭平 本田秀晃	31	札幌市病院学会に向けての発表準備・報告
15	症例検討会⑦	2017. 7. 31	太田経介 須貝英理 本田秀晃	37	『歩行器の導入にて活動範囲を庭まで拡大させQOL向上を目指した進行性核上性麻痺事例』 『発声へのアプローチを行い嚔声の軽減を目指したパーキンソン病の一症例』 『離床への意欲低下を認める脊髄梗塞患者に対し、成功体験を通じて意欲向上を図った一例』
16	症例検討会⑧	2017. 8. 7	木村直子 鶴田知也 佐藤高大	42	『下血に伴う呼吸機能低下の改善に着目し、歩行再獲得を目指したPD患者の一症例』 『袖通し場面に着目しスムーズな更衣動作の獲得を目指した一症例』 『軟口蓋挙上感覚の運動訓練を中心としたアプローチにより、鼻咽腔閉鎖不全機能が向上したパーキンソン病症例』
17	予演会	2017. 8. 14	金村智紀	37	『リハビリテーションとボツリヌス療法の併用により動作改善を認めたマシヤドジョセフ病の一例』
18	リサーチ	2017. 8. 17	有馬恭平	31	札幌市病院学会に向けての発表準備・

	カンファレンス⑤		須貝英理		報告
19	症例検討会⑨	2017. 8. 25	丸野詩奈莉 松本悠希 大月春奈	32	『在宅復帰を目指したパーキンソン病の一例～在宅調査後の環境調整と今後の展望～』 『覚醒・リハビリ意欲が向上したことで、施設入所から在宅復帰を視野に入れた症例』 『本態性振戦を伴うパーキンソン患者の音声振戦に対するアクセント法を用いて介入した症例』
20	症例検討会⑩	2017. 9. 4	原田菜美恵 山野遥香	34	『プロソディー訓練により断続性発話の軽減を目指した脊髄小脳変性症の一症例』 『食事に介助を要している進行性核上性麻痺患者の捕食動作に着目した介入』
21	予演会	2017. 9. 7	小田柿糸子 庄子梨沙	42	『神経難病患者へのAAC（拡大・代替コミュニケーション手段）導入支援における当院の現状と課題～第2報～』 『スイッチ導入により生活に楽しみを見いだせたALS患者の一症例』
22	伝達講習	2017. 9. 11	太田経介	40	『神経難病患者に対する進化したリハビリテーション ～チーム医療の質を高めるセラピストになるためには～』
23	伝達講習	2017. 9. 14	角翔太	35	『ふまねっと講習会 伝達講習』
24	リサーチカンファレンス⑥	2017. 9. 21	有馬恭平 須貝英理	26	札幌市病院学会に向けての発表準備・報告
25	症例検討会⑪	2017. 9. 26	鹿野咲 岡井香奈江	31	『方向転換が困難となり自宅内移動が制限されたPD患者への関わり』 『生きがいである仕事のために応用歩

					行時のふらつき改善委に向けたアプローチ』
26	症例検討会⑫	2017. 10. 2	有馬恭平 那須和佳奈	27	『視覚的な代償手段を用いて服薬忘れを減らし、自宅内での安全な移動の獲得を図った一症例』 『視覚的cueを用いた環境調整ですくみと加速歩行を軽減し、安全な自宅内移動を確立させた一症例』
27	リハ部勉強会①	2017. 9. 5	木村直子	30	『神経難病患者に対する呼吸リハビリテーション』 ～神経難病を呼吸器の面からもアプローチできるためには～
28	伝達講習	2017. 10. 19	庄子梨紗 太田経介 角 翔太 檜村 祐哉 轟田 知也 原田 菜美恵	30	『患者さんもできる指ヨガ・椅子ヨガ』 『太極拳～心も体も伸びやかに、大きくゆったりと…』
29	リサーチカンファレンス⑦	2017. 10. 24	須貝 英理 那須 和佳奈 本田 秀晃 有馬 恭平	30	『高次脳機能面に着目し、発話速度の調整法を検討したパーキンソン病の一症例』 『パーキンソン病患者への足底挿板の装着が立位バランス能力に与える効果』 『ポリオ後遺症・PD併発患者に対し、アームサポート「MOMO」導入により食事動作時の改善が見られた事例』 『パーキンソン病患者におけるFIMとMoCA-Jの関係性』
25	症例検討会⑬	2017. 10. 30	太田 経介 本田 秀晃	30	『動作パターンの学習により疼痛軽減に至ったスモン事例～定着に向けた介入により現状維持を目指す～』 『家事役割の継続に向け、安全かつ本

					人の満足度の高い方法を検討したSCD症例』
26	症例検討会⑭	2017. 11. 6	木村 直子 轟田 知也 佐藤 高大	33	『他職種協働で低栄養改善を目指したPD患者の一症例-食事時の姿勢改善に着目して-』 『「動く」から「使う」への変換を目指した橈骨神経麻痺を合併したパーキンソン病の一症例』 『フレージング法を使用し、発話明瞭度向上を目指した脊髄小脳変性症の一症例』
26	伝達講習	2017. 11. 9	飯島 健介 鳥羽 悠斗	26	『第2回 神経筋難病 医療用HAL研究会（2017年）』
27	リサーチカンファレンス⑧	2017. 11. 14	本田 秀晃 藤田 賢一 飯島健介	30	『ポリオ後遺症患者の食事動作改善に対するアームサポートの効果』 『ボツリヌス毒素による治療が嚥下機能に与える影響』 『HALを使用したサイバニクス治療により歩行能力が向上した球脊髄性筋萎縮症の一症例』
28	リサーチカンファレンス⑨	2017. 11. 16	須貝 英理 那須和佳奈 有馬恭平 坂野康介 小林阿佑美 本間冬真 小田柿糸子	33	『高次脳機能障害面に着目し、発話速度の調整法を検討したパーキンソン病の一症例』 『パーキンソン病患者へのインソールの装着が立位バランス能力に与える変化』 『パーキンソン病患者におけるFIMとM○CA-Jの関係性』 『失調歩行に対するHALトレーニングの経験～歩行中動揺に対する定量的評価の試み～』 『呼吸不全に伴うALS患者に対するHAL

					<p>を使用したサイバニクス治療の検討』</p> <p>『MoCA-Jによる脊髄小脳失調症の認知機能障害に関する報告』</p> <p>『パーキンソニズムによる摂食嚥下障害をきたしたSCD患者への嚥下内視鏡検査の活用』</p> <p>『SCD患者の摂食嚥下障害に対する嚥下内視鏡検査の活用』</p>
29	予演会⑤	2017. 11. 21	飯島 健介	35	『HALを使用したサイバニクス治療により歩行能力が向上した球脊髄性筋萎縮症の一症例』
30	症例検討会⑮	2017. 11. 27	丸野詩奈莉	26	『自宅内で転倒を繰り返し骨折のリスクがある、CIDP患者に対して安全な移動能力獲得を目指した一症例』
31	リサーチカンファレンス⑩	2017. 11. 29	鹿野咲	29	『食事の自力摂取が困難となったパーキンソン病患者の一例～姿勢と食べこぼしの関連性について～』
32	症例検討会⑯	2017. 11. 30	大月春奈	34	『食物を使用した咀嚼訓練により、食塊形成能向上と日常の食事場面への般化を目指したパーキンソン病患者の一症例』
33	症例検討会⑰	2017. 12. 1	松本悠希	27	『右足のひきずりを軽減し、再び生活の中心である農作業への参加を目指した症例』
34	リサーチカンファレンス⑪	2017. 12. 18	有馬恭平 尾野日香 坂野康介 小田柿糸子	25	<p>『パーキンソン病患者におけるFIMとMoCA-Jの関係性』</p> <p>『環境調整により習慣としていた新聞読みを再獲得できた進行性核上性麻痺の一症例』</p> <p>『失調歩行に対するHALトレーニングの経験～歩行中動揺に対する定量的評価の試み～』</p>

					『攣縮性斜頸を伴うSCD患者の嚥下障害に対する嚥下内視鏡検査を用いた介入について』
35	リサーチ カンファ レンス⑫	2017. 12. 19	本田秀晃 本間冬真	27	『ポリオ後遺症患者の食事動作改善に対するアームサポートの効果』 『スクリーニング検査のデータから考 えるMachado-Joseph病の認知機能障害 の傾向』
36	リサーチ カンファ レンス⑬	2017. 12. 21	那須和佳奈 須貝英理 畑香里 小林阿佑美 藤田賢一	29	『パーキンソン病患者へのインソールの装着が立位バランス能力に与える変化』 『高次脳機能障害面に着目し、発話速度の調整法を検討したパーキンソン病の一症例』 『高次脳機能障害を呈したパーキンソン病患者が生きがいである書写を継続するための連携について』 『呼吸不全に伴うALS患者に対するHALを使用したサイバニクス治療の検討』 『dystonic tremorを伴うSCAにおけるボツリヌス毒素Aによる嚥下機能への治療効果』
37	伝達講習	2017. 12. 26	坂野康介 馬道健弘 本間冬真	27	『エコロコ！やまべえ誰でも体操 専門職向け普及員養成講座』
38	予演会⑥	2018. 1. 12	那須和佳奈 有馬恭平 本田秀晃 須貝英理	36	『パーキンソン病患者へのインソールの装着が立位バランス能力に与える変化』 『MoCA - JとFIMを用いたパーキンソン病患者の認知機能面と日常生活動作自立度の関係性調査』 『ポリオ後遺症患者の食事動作改善に

					<p>対するアームサポートの効果』</p> <p>『高次脳機能障害面に着目し、発話速度の調整法を検討したパーキンソン病の一症例』</p>
39	予演会⑦	2018. 1. 16	畑香里	28	『高次脳機能障害を呈するパーキンソン病患者が書写を継続する為の関わり』
40		2018. 1. 26	馬道健弘	26	『次年度研究発表について』
41	症例検討会⑧	2018. 2. 5	山野遥香	27	『食事動作で右手を使用していなかったパーキンソン病患者に対し、自助具スプーン導入により右手への意識の変化がみられた症例』
42	症例検討会⑨	2018. 2. 19	鹿野咲 岡井香奈江	28	<p>『呼吸機能改善と在宅復帰を目指すII型呼吸不全を合併した筋強直性ジストロフィーの一例』</p> <p>『注意障害を呈する自宅での転倒を繰り返すパーキンソン病患者との関わり』</p>
43	リサーチカンファレンス⑭	2018. 2. 23	太田経介 坂野康介	23	<p>『SCD患者におけるMini-BESTestを用いたバランス障害特性』</p> <p>『SCD患者におけるMini-BESTestを用いた転倒予測』</p> <p>『脊髄小脳変性症患者に対してMini-BESTestを用いた理学療法介入の経験』</p>
44	症例検討会⑩	2018. 3. 5	丸野詩奈莉 松本悠希 大月春奈	23	<p>『入院中、急な廃用によって意欲低下がみられ、関わり方に難渋したパーキンソン病患者の一例』</p> <p>『歩行器歩行から独歩見守りまで獲得したが、恐怖感が強く、見守りなしでの独歩獲得に難渋している例』</p> <p>『呼吸機能に着目し、発声機能の向上</p>

					を目指した脊髄小脳変性症の一症例』
45	リサーチ カンファ レンス⑮	2018. 3. 8	太田経介	26	『SCD患者におけるMini-BESTestを用いたバランス障害特性』
46	リサーチ カンファ レンス⑰	2018. 3. 19	尾野日香 小田柿糸子	26	『環境調整により新聞読みを再獲得できた進行性核上性麻痺の一症例』 『痙縮性斜頸を伴うSCD患者の嚥下障害に対する嚥下内視鏡検査を用いた介入について』
47	症例検討 会⑱	2018. 3. 22	山野遥香 佐藤高大	22	『役割喪失により自宅で不活動となったパーキンソン病患者に対し、役割の再獲得により活動性向上を図った一症例』 『嚥下障害を伴う多系統萎縮症患者の在宅復帰を目指したアプローチについて』

(2) 「わくわくりハビリテーション」について

「わくわくりハビリテーション」とは、神経難病のリハビリテーションを確立していく中で、どのようなことがリハビリテーションの対象となり、患者さんの目標となりえるのかを試行錯誤している中で、現時点でみえているものをリハビリテーションに取り入れた、北祐会神経内科病院のリハビリテーションスタッフが考えた神経難病のリハビリテーションの形の1つです。

私は（理学療法士 中城雄一）は1999年に北祐会神経内科病院に勤務し、リハビリやレクリエーション、患者会活動など様々な場面で多くの患者さんと接してきました。患者さんからは病気の貴重な体験を聞かせて頂き、一緒にリハビリを進めていく中で的確なアドバイスを頂くことができました。私たちが提供できる機能や能力障害に対するリハビリテーションは神経難病であっても効果的で歩行障害やADL障害、構音障害の改善が可能であることを経験してまいりました。その一方で病気の進行とともにリハビリテーションの効果が思うようにならない事も経験しました。いま私たちが考える神経難病のリハビリテーショ

ンは、失われた機能や能力の再建のみがリハビリテーションの目標ではなく、難病があっても社会参加を目指す、そのお手伝いをすることが神経難病のリハビリテーションの意義だと考えています。

社会参加をお手伝いする方法として、「わくわくりハビリテーション」を2017年度から開始しました。第1回、第2回の報告をします。

神経難病リハビリテーション部門 中城雄一

① 第1回わくわくりハビリテーション

参加状況まとめ	
太極拳①・②	32
ふまねっと	11
タンゴ	9
ヨガ①・②	38
音楽①・②・③	41
絵画①・②・③	14
Q1、どんなところが良かったと感じますか？（複数）	
気分がすっきりした	16
体が軽くなった	12
自信が付いた	5
楽しかった	46
自由記載	5
先生が意外にビックリした。みんなうまかった	
元気になる	
どれも考えられていてよかった	
1, 2, 1, 2のリズムで足が出るようになった（タンゴ）	
太極拳に興味があったので、朝はタイミングが合わずなかなか参加できていなかった	

Q2、本日のような楽しいリハビリをまたやってみたいと思いますか？	
是非やりたい	38
機会があればやりたい	21
どちらでもよい	5

やりたくない	0
--------	---

Q3、次にやってみたい事はありますか	
ふまねっと（歌付き）	2
音楽、楽器	2
好きな歌を歌ってみたい。テレサテン「空港」	1
ヨガ	10
歌	1
今日ので良い	2
出来ない	1
童謡	1
昔のみんなが知っている歌	1
独唱	1
ゆったりしたもの	1
アロマセラピー	1
ダンス	4
家で出来る物	1
絵画	2
太極拳	7
難易度の高い太極拳	1
片足のステップ	1
タンゴ	1
良く分からない	2
なし	8
未回答	14
Q4、今後どのくらいの頻度でやってみたいですか？	
年に1度	7
半年に1度	21
3ヶ月に1度	15
月に1度	15
週に1度	5

未回答	1
-----	---

Q5、本日の満足度は	
1	0
2	0
3	0
4	0
5	8
6	6
7	8
8	17
9	4
10	22



ふまねつと



太極拳



音楽



ヨガ



絵画



タンゴ

② 第2回わくわくりハビリテーション

78名

参加状況まとめ	(名)
太極拳①・②	30
ふまねっと	17
タンゴ	14
やまべえ①・②	17
ヨガ①・②	37
音楽①・②	41
絵画①・②・③・④	26

アンケート集計 回収率 88.5% (69 / 78)

Q1: どんなところが良かったと感じますか	(名)
気分がすっきりした	17
体が軽くなった	10
自信が付いた	6
楽しかった	46

Q2: わくわくりハビリにまた参加したいですか	(名)
是非参加したい	36
機会があれば参加したい	33
どちらでもよい	0
参加したくない	0

Q3: 次回にやってみたい事は	(名)
太極拳	3
歌・音楽	10
タンゴ・フラダンス・ワルツ	7

ヨガ	5
やまベエ	2
ふまねっと	4
絵画	2
陶芸	1
旗揚げ	1
体を動かす事・ラジオ体操	3

Q4: 適切な開催頻度は	(名)
1年に1回	3
6ヶ月に1回	22
3ヶ月に1回	22
1ヶ月1回	19
1週間に1回	2

Q5: 満足度は何点ですか (1低い~10高い)	(名)
1	0
2	0
3	1
4	1
5	5
6	5
7	14
8	18
9	8
10	17



絵画



音楽



ふまねっと



指ヨガ



やまべ体操



太極拳



タンゴ

(3) 活動報告

理学療法領域、言語聴覚療法領域、作業療法領域別及び札幌パーキンソンMS神経内科クリニックでの活動を報告する。

1) 理学療法領域

1) 学会発表

月 日	学会・研修会名	演題名	氏 名	備考
2017. 4. 22	第8回日本ニューロリハビリテーション学会	HAL®医療用下肢タイプにより歩行能力向上を認めた球脊髄性筋萎縮症患者の1症例	飯島	富山県富山市 国際会議場
2017. 7. 22	第16回北海道病院学会	呼吸不全を伴いALS患者に対するHALを使用したサイバニクス治療の経験	小林	ロイトン札幌
2017. 8. 2	第24回脳機能とリハビリテーション研究会学術集会	リハビリテーションとボツリヌス療法の併用により動作改善を認めたマシャド・ジョセフ病の一例	金村	千葉県保健医療大学
2017. 12. 16	第6回日本脳神経HAL®研究会	歩行耐久性が低下した球脊髄性筋萎縮症においてHAL®治療は何を変えたか	飯島	茨城県つくば市 筑波大学
2018. 2. 3	第38回札幌市病院学会	パーキンソン病患者へのインソールの装着が立位バランス能力に与える変化	那須	札幌市医師会館

2) 論文

掲載月	雑誌名	演題名	氏 名	備考
2017. 8	月刊 難病と在宅ケア	重症度分類4～5度のパーキンソン病患者のり	坂野	

		ハビリテーション		
2017. 8	理学療法第34 巻第8号	多発性硬化症患者に対 する発症初期から生活 期までの理学療法の関 わり	中城	
2018. 2	基礎から確 認！PT臨床実 習チェックリ スト（共著）	疾患の基礎知識とレポ ートの書き方 パーキ ンソン病	中城	

3) 講義・講演

月 日	学会名・学校名	講義、講演名	氏 名	備考
2017. 4. 13～5. 15	札幌医学技術 福祉歯科専門 学校	神経難病のリハビリテ ーション（4回）	坂野	
2017. 6. 13	大同生命主催 研修会	ロボットスーツHALに よるリハビリテーショ ン	飯島	
2017. 7. 7～13	北海道千歳リ ハビリテーシ ョン学院	神経難病のリハビリテ ーション（2回）	中城	
2017. 8. 18	北海道札幌視 覚支援学校 専攻科教員対 象研修会	パーキンソン病のリハ ビリテーションの基礎	中城、高 藤	
2017. 12. 10	北海道札幌視 覚支援学校 理療研修セン ター 臨床講 座 1	脳卒中片麻痺、パーキ ンソン病の基本動作評 価から治療	中城、 太田	
2018, 3, 14	北海道札幌視 覚支援学校	神経難病の実際、症例 検討会	中城	

	理療研修センター			
--	----------	--	--	--

4) 検診

月 日	検診名	開催場所	氏 名	備考
2017. 9. 13～9. 15	利礼3町在宅難病患者訪問検診	利尻島・礼文島	坂野	
2017. 10. 22	南檜山地区難病医療福祉相談会	江差町	坂野	

5) 研修受け入れ

月 日	施設名	内容		
2017. 5～11	北海道札幌視覚支援学校 理療研修センター（6回12日間）	マッサージ研修	鈴木先生、古川先生、蛭谷先生、羽立先生、吉村先生	
2017. 4. 14	青森慈恵会病院	HAL見学		
2017. 10. 26～27	釧路労災病院	HAL見学		
2017. 12. 5	札幌龍谷高等学校	病院・HAL見学		
2018. 3. 5	みらいアンコール基金	病院・HAL見学		

6) 社会活動・ボランティア

イベント名	主催	参加者	開催場所
パーキンソン病とともにあゆむ会	北海道医療大学 佐々木教授	中城、坂野	北海道難病連
ロボットスーツ HAL	北海道ロボットスーツ HAL 研	中城	

研究会 幹事会 (3回)	究会		
いきいき健康まつり in 山の手	山の手地区福祉のまちふれあいセンター/山の手介護予防センター	坂野	山の手小学校
全道難病集会	北海道難病連	飯島、那須、松本	かでの 2.7
いけまぜ夏フェス in 登別	にわとりくらぶ	森、鹿野	障害児キャンプ (登別)
いきいき健康まつり in 二十四軒	二十四軒連合町内会/山の手琴似介護予防センター	坂野	二十四軒会館
ALS 当事者によるローテクコミュニケーション支援講習会 (15回)	一般社団法人 日本 ALS 協会	鹿野	さっぽろ神経内科病院
パーキンソン病とともにあゆむ会	北海道医療大学 佐々木教授	中城、坂野、角	北海道難病連
北海道難病連チャリティバザー	北海道難病連	中城、坂野、木村、角、金村、高藤、丸野、松本、小林	北海道難病連
三和荘介護予防セミナー	発寒介護予防センター	坂野	三和荘
難病患者のクリスマス会	北海道難病連	木村	サンプラザ札幌
日本在宅医療連合学会 第1回地域フォーラム実行委員会 (2回)	日本在宅医療連合学会	中城	札幌市医師会館
パーキンソン病とともにあゆむ会	北海道医療大学 佐々木教授	木村、太田	北海道難病連

2) 作業療法領域

1) 学会発表

月 日	学会・研修会名	演題名	氏 名	備考
2017.9.22	第 51 回日本作業療法学会	スイッチ導入により、生活に楽しみを見出した ALS 患者の一症例	庄子	
2018.2.3	第 38 回札幌市病院学会	ポリオ後遺症患者の食事動作改善に対するアームサポートの効果	本田	札幌市医師会館
2018.2.3	第 38 回札幌市病院学会	パーキンソン病患者へのインソールの装着が立位バランス能力に与える変化	那須	札幌市医師会館

2) 社会活動・ボランティア

月日	イベント名	主 催	参加者	開催場所
2017.8.26	いきいき健康まつり in 山の手	山の手地区福祉のまちふれあいセンター/山の手介護予防センター	馬道	山の手小学校
2017.8.5	全道難病集会	北海道難病連	小室 本間 馬道 鶴田	かでの 2.7
2017.9.8	いきいき健康まつり in 二十四軒	二十四軒連合町内会/ 山の手琴似介護予防センター	馬道	二十四軒会館
2017.10.9~14	北海道難病連チャリティバザー	北海道難病連	加藤 高橋 小室 庄子 有馬 馬道	北海道難病連

			山野	
2017. 12. 13	難病患者のクリスマス会	北海道難病連	本田 山野	サンプラザ札幌
2018. 3. 17	パーキンソン病とともにあゆむ会	北海道医療大学 佐々木教授	本間	北海道難病連
2017. 9. 8	二十四軒健康まつり	(一社)北海道リハビリテーション専門職協会	馬道	
2017. 10. 19	琴似マンション自治会 運動教室	(一社)北海道リハビリテーション専門職協会	馬道	
2017. 11. 14	フレンドリー山の手 体操教室	(一社)北海道リハビリテーション専門職協会	馬道	
2017. 11. 21	フレンドリー山の手 体操教室	(一社)北海道リハビリテーション専門職協会	馬道	
2017. 12. 14	琴似マンション自治会 運動教室	(一社)北海道リハビリテーション専門職協会	馬道	
2018. 2. 6	フレンドリー山の手 体操教室	(一社)北海道リハビリテーション専門職協会	馬道	
2018. 3. 8	琴似マンション自治会 運動教室	(一社)北海道リハビリテーション専門職協会	馬道	

3) 言語聴覚療法領域

1) 学会発表

学会・研修会名	演題名	氏名	備考
第5回日本難病医療ネットワ	神経難病患者への AAC (拡大・代替コミュニケーション手段) 導入支援における	小田柿	

一ク学会	当院の現状と課題～第2報～		
第38回札幌市 病院学会	高次脳機能面に着目し発話速度の調整法 を検討したパーキンソン病の一症例	須貝	札幌市医師会館

2) 論文

掲載月	雑誌名	演題名	氏名	備考
2017.9.1	姿勢から介入する摂 食嚥下 脳卒中患者 のリハビリテーショ ン	5章 STの視点からみ た嚥下練習 1.一般的 に実施される脳卒中患 者の嚥下練習	藤田	

3) 講義・講演

月 日	学会名・学校名	講義、講演名	氏名	備考
2017.5.14	パーキンソン病と ともに歩む会	発声・発音の練習	藤田	北海道難病連
2017.10.1	パーキンソン病と ともに歩む会	さあ！腹の底から声を出 してみよう	樫村	北海道難病連
2017.11.22	地域いきいきサロ ン	飲み込みのしくみ～誤嚥 性肺炎を防ごう～	小玉、 楠山	琴似コーポ
2018.3.17	パーキンソン病と ともに歩む会	さあ！腹の底から声を出 してみよう	樫村	北海道難病連

4) 検診

月 日	検診名	開催場所	氏名	備考
2017.5.15～16	北海道総合在 宅ケア事業	苫前町	藤田	
2017.7.25～26	北海道総合在 宅ケア事業	苫前町	藤田	
2017.9.13～14	北海道総合在 宅ケア事業	苫前町	藤田	
2017.11.15～16	北海道総合在 宅ケア事業	苫前町	藤田	

2018. 1. 22～23	北海道総合在宅ケア事業	苫前町	藤田	
2018. 3. 22～23	北海道総合在宅ケア事業	苫前町	藤田	

5) 研修受け入れ

月 日	施設名	内容		
2017. 10. 26 ~ 27	釧路労災病院	見学		

6) 社会活動・ボランティア

月 日	イベント名	主催	参加者	開催場所
2017. 5. 14	パーキンソン病とともに歩む会	北海道医療大学 佐々木教授	藤田、檜村	北海道難病連
2017. 8. 5	全道難病集会	北海道難病連	佐藤、原田	かでの 2.7
2017. 10. 1	パーキンソン病とともに歩む会	北海道医療大学 佐々木教授	藤田、檜村、大月	北海道難病連
2017. 10. 9～14	北海道難病連チャリティバザー	北海道難病連	藤田、小田柿、檜村、大月、原田、佐藤	北海道難病連
2017. 12. 13	難病患者のクリスマス会	北海道難病連	藤田、楠山、大月、佐藤	サンプラザ札幌
2018. 3. 17	パーキンソン病とともに歩む会	北海道医療大学 佐々木教授	藤田、檜村、小玉	北海道難病連

4) 札幌パーキンソン MS 神経内科クリニック関係

1) 講義・講演

月 日	学会名・学校名	講義、講演名	氏名	備考
2017. 7. 25	院内研修	院内伝達講習 (PD にお	西村	

		ける摂食嚥下障害における理解とアプローチの考え方)		
2017. 10. 14	シャルコーマリートゥース病患者会	医療用 HAL を利用した治療について	重岡	
2017. 11. 8 11. 15	北海道リハビリテーション大学校	神経難病のリハビリテーション	重岡	
2017. 11. 30	北区在宅ケア連絡会	神経難病のリハビリテーションについて～パーキンソン病を中心に～	相馬	
2018. 3. 29	豊平アップル会	パーキンソン病の発声と発音について	西村	

2) 研修受け入れ

月 日	施設名	内容		
2017. 10. 27	釧路労災病院	病院見学		

3) 社会活動・ボランティア

月 日	イベント名	主催	参加者	開催場所
2017. 5. 14	パーキンソン病とともにあゆむ会	北海道医療大学 佐々木教授	重岡、畑中、徳永	北海道難病連
2017. 6. 27 11. 11 2018. 3. 13	ロボットスーツ HAL 研究会 幹事会 (3回)	北海道ロボットスーツ HAL 研究会	重岡	
2018. 1. 13	市町村担当者会議		相馬	札幌医療リハビリ専門学校
2017. 10. 1	パーキンソン病とともにあゆむ会	北海道医療大学 佐々木教授	西村	北海道難病連

(4) HAL 治療

2017年4月～2018年3月までに HAL 治療実施人数を示す。筋ジストロフィーなど HAL 治療対象疾患のほか、脊髄小脳変性症やパーキンソン病患者を含めた72名に実施し、その治療効果を研究発表している。

疾患名	実施人数	脱落数
筋ジストロフィー	13	
球脊髄性萎縮症	3	
筋萎縮性側索硬化症	2	
シャルコー・マリー・トース病	3	
脊髄性筋萎縮症	4	1
封入体筋炎	2	
多発性硬化症	9	1
遠位型ミオパチー	1	
先天性ミオパチー	2	
脊髄小脳変性症	23	
パーキンソン病	4	
痙性対麻痺	2	
脳性麻痺	1	
慢性炎症性脱髄性多発神経根炎	1	
進行性核上性麻痺	2	
合計	72	2

症例報告 理学療法士 飯島健介

『歩行耐久性が低下した球脊髄性筋萎縮症において HAL®治療は何を変えたか』

1. 症例紹介

【年齢・性別】60代男性【身長・体重】168cm 60kg【診断名】球脊髄性筋萎縮症(SBMA)【経過】2008年に右下肢筋力低下,CK値の異常. 2009年SBMAと診断. 2010年200mの連続歩行にて呼吸困難感を自覚するようになり,杖を購入. 2014年四肢の筋力低下(上肢>下肢)を自覚. 2016年12月, 2017年4月, 8月(計3回)HAL治療を目的に入院.

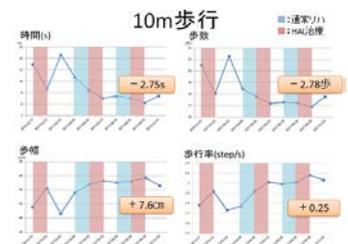
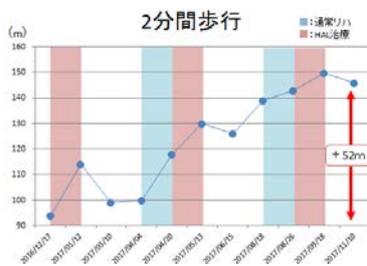
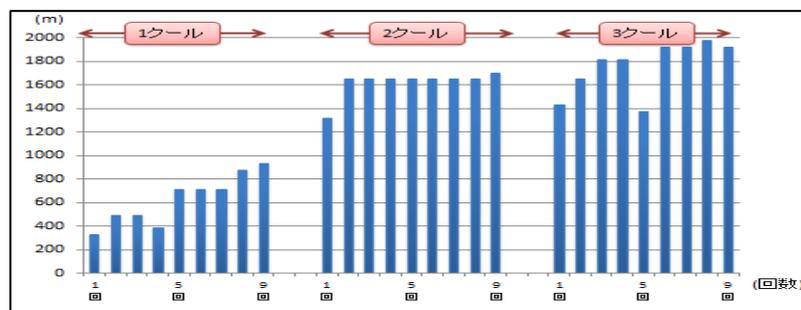
2. HAL治療前評価(2016/12/17)

【主訴】右足が出しづらい, 疲れやすい【筋力(MMT)】股関節 屈曲 4/4 伸展 3/4 膝関節 屈曲 3³/₄ 伸展 4/4 足関節 背屈 4/4 底屈 2/2⁺【感覚】足底に表在感覚鈍麻あり(右>左)【筋萎縮】両足部凹側変形あり【10m歩行】速度: 0.87m/秒, 歩数: 20.53歩, 歩行率 1.78, 歩幅: 49cm【2分間歩行】94m, 【連続歩行可能最大距離】165m

3. HAL設定と方法

サイバニック随意制御モード, タスク WALK5, トルクチューナーは全関節にて 1, 右股関節のバランスチューナーを伸展方向 4, 感度レベルは右股関節, 膝関節で A-2, 左股関節, 膝関節で A-1, トルクリミットは 100%.

4. HAL装着下での連続歩行距離



CK 値とクレアチニンの推移

CK 値は筋破壊、運動負荷の目安として、クレアチニンは筋肉量の目安として用いられている疾患特性上一般的には経過と共に筋破壊が進んでいき、CK 値は高値を示す。一方で筋肉量が減少していく事でクレアチニンの値は減少傾向となりやすい。

HAL 治療開始後、CK 値の値は減少し、クレアチニンの値は上昇を認めた。



CK 値とクレアチニンの推移

HAL 治療は何を変えたのか

通常リハビリでは廃用症候群の改善は可能であるが、筋萎縮は進行し歩行耐久性は低下していく。一方で HAL 治療は通常のリハビリよりも運動負荷が減少しより多くの歩行練習を可能とする。そして、正しい歩行姿勢での反復練習も可能にする。そのため、通常リハビリでは達成しえなかった歩行耐久性の向上と歩容の改善を認めた。また、HAL 治療によって筋萎縮の進行を抑制する可能性も示唆された。

(3) 神経難病看護・ケア部門

院外・院内研究会参加、看護部教育、認定看護師研修、対外活動を報告する。

1) 院外研修会

日 時	研修テーマ	主 催	参加者
2017. 4. 30～5. 3	新人看護職員研修（第1回）研修会	北看協	2名
2017. 5. 9～10	看護研究に使える統計学—講義コース—研修会	北看協	1名
2017. 5. 17～19	新人看護職員研修—研修責任者・教育担当者	北看協	2名
2017. 5. 25	第1回北海道パーキンソン病臨床研究会	エフピー株式会社	2名
2017. 7. 1	看護実践に基づいた患者・利用者記録システム、実践フォーカスチャータリング2017	日本フォーカスチャータリングヘルスケアマネジメント	3名
2017. 7. 8	神経難病療養支援	北海道難病医療ネットワーク連絡協議会	1名
2017. 7. 11① 2017. 7. 12②	現場に活かせるリスクマネジメント基礎編～KYTでリスク感性を高めよう～	北看協	①1名 ②1名
2017. 7. 14	看護倫理—看護で大切なことは何か—	北看協	2名
2017. 7. 26	生活の場の戻る患者さんの退院支援を学ぶ	北看協	1名
2017. 8. 3	2017年度 感染対策セミナー	JICSA	2名
2017. 8. 8	チームの中で看護補助者の力を発揮しよう	北看協	2名
2017. 8. 17～18	その人らしい最期を迎えるために	北看協	2名

2017. 8. 19	第 10 回北海道感染対策セミナー	サラヤ(株)	2 名
2017. 8. 22	高齢者終末期医療の現状と課題	札幌市西区民間 病院連携協議会	1 名
2017. 9. 5～6	今こそベテランナースを活かすときー 自己の強みをより発揮できるようにー	北看協	2 名
2017. 9. 7	看護実践に活かすフィジカルアセスメント	北看協 札幌第 1 支部	1 名
2017. 9. 8	認知症ケア対象者を深く理解するためにー	北看協	2 名
2017. 9. 14～15	現場で活かせる感染管理	北看協	2 名
2017. 9. 26	認知症の人の生活を支えるための看護	ナースつくる	2 名
2017. 10. 29	依存症との闘い～今日も一日がんばれた！	保健師職能委員会	1 名
2017. 10. 30～31	家族看護一家族の理解を深めよう	北看協	1 名
2018. 3. 17～18	第 31 回ユマニチュード 入門コース	ユマニチュード	2 名

23 コース 述べ 38 人

2) 院内研修

日 時	研修テーマ	講 師	主 催	参加数 (看護職/全体)
2017. 6. 14	<伝達講習> 第 17 回摂食嚥下リハビリテーション北海道地区研修会	須貝 英理 (ST) 佐藤 高大 (ST)	北海道神経難病 リハビリテーション部	9 / 52
2017. 7. 25	<伝達講習> パーキンソン病における嚥下障害の理解	西村 友佳 (ST)	北海道神経難病 リハビリテーション部	4 / 39

	とアプローチ の考え方			
2017. 9. 29	認知症患者の 理解トコミュ ニケーション	伊志嶺 志津子 (認知症認定看護 師) (札幌東訪問看護 ステーション 管 理者)	神経難病緩和医 療研究会 医安全	13/53
2017. 10. 20	神経難病にお ける症状に合 わせたスイッ チの工夫	松尾 光晴 (パナ ソニックエイジフ リー(株))	北海道神経難病 リハビリテーシ ョン部 医安全	1 /27
2017. 10. 26	認知症サポー ター	馬道 健弘 (認知 症サポーターキャ ラバン・メイト)	神経難病緩和医 療研究会 医安全	7 /42
2017. 11. 15	ツールBoxを使 った嘔吐物処 理①	感染制御部	院内感染対策委 員会 感染制御部	4 /41
2017. 11. 28	介助グローブ の使い方	矢久保伸二 (ケー プ)	褥瘡管理委員会 医療安全委員会	15/44
2018. 1. 24	ツールBoxを使 った嘔吐物処 理②	感染リンクナース	院内感染対策委 員会 感染制御部	15/22
2018. 2. 9	個人情報○× クイズ	個人情報委員会	個人情報委員会 医療安全委員会	8/39
2018. 3. 16	接遇	吉川 修 (ファイザー(株))	看護部 医安全	18/58

10 コース

3) 看護部教育

日 時	研修テーマ	参加者	担 当
2017. 4. 3～7	入職時オリエンテーション ・各部署 各委員会の役割 と活動内容 ・看護記録 ・感染リンク ・セーフティマネジメント ・退院支援 ・電子カルテ ・医療機器 ・障害別看護 ・コミュニケーション ・フィジカルアセスメント	2名	看護部長 各委員長 教育委員 看護師
2017. 5. 1	ラダー I 1ヵ月を振り返って	2名	教育委員
2017. 5. 10	ラダー I KYT(転倒)	3名	教育委員
2017. 6. 16	ラダー I ラダーIV 疾患別看護	2名	教育委員 担当看護師
2017. 8. 3	救急看護	2名	教育委員
2017. 8. 3	ラダー I 呼吸補助機器	2名	教育委員
2017. 10. 23	ラダー I 意思決定支援	3名	2名
2017. 11. 21	ラダーIII リーダーシップ	4名	看護部長、教育委員
2018. 2. 8	ラダー I KYT(薬剤管理)	3名	教育委員
2018. 2. 28	ラダー I、II、III 1年を振り返って	5名	教育委員
2018. 3. 1	ラダーIII 退院支援	5名	教育システム委員

4) 保健師助産時看護師実習指導者講習会

日 時	研修テーマ	主催	受講者
2018. 1. 12～3. 9	H29年度保健師助産時看護師実習指導者講習会	北看協	1名

5) 対外活動

(救護班)

2017. 8. 5～6	北海道難病連 全道集会 医療班	難病連	2名
2017. 12. 10	北海道難病連札幌支部 チャリティクリスマスパーティー	難病連	1名

6) 実習受け入れ

年 月 日	学校名 実習内容	受入数
2017. 10. 24～25	天使大学1年 基礎看護学臨地実習Ⅰ 看護ケア提供システム論	4名
2017. 10. 31～11. 1	天使大学1年 基礎看護学臨地実習Ⅰ 看護ケア提供システム論	4名
H2017. 6. 27～7. 13	札幌保健医療大学3年 高齢者看護	6名
2017. 10. 3～10. 19	札幌保健医療大学3年 高齢者看護	6名
2017. 8. 22～9. 1	北海道科学大学4年 看護総合実習	4名

7) 病院見学・看護の講義

年 月 日		受入数
2017. 11. 28	武田薬品工業(株) ホスピタルトレーニングプログラム	8名
2017. 12. 5	札幌龍谷学園高等学校	4名
2017. 12. 12	札幌龍谷学園高等学校	3名
2018. 3. 5	みらいアンコール基金よりカンボジアからの留学生	1名

(4) 神経難病医療相談・福祉支援部門

検診、医療相談会、サロン活動、研修参加および講義を行った。

1. 検診

月 日	参加者	名 称
2017. 9. 13～15	小林 陽子	平成 29 年度神経難病患者訪問検診 ～礼文町、利尻町、利尻富士町 (稚内保健所利尻支所)

2. 医療相談会（相談員としての協力）

月 日	参加者	名 称
2017. 12. 2 札 幌	小林 陽子	平成 29 年度 札幌市難病医療相談会 ～テーマ 後縦靭帯骨化症に伴う慢性疼痛 (札幌市難病患者等医療相談事業)

3. 神経難病患者さんと支える人のためのサロン活動（院内）

月 日	名 称
2017. 7. 21	第 3 回 サロンあうる テーマ：アロマで癒されませんか？ (患者・家族向け) 参加者：計 9 名 院内スタッフ 7 名
2017. 10. 27	第 4 回 サロンあうる テーマ：文化の秋 アートで気持ちを伝えてみませんか？ (患者・家族向け) 参加者：計 9 名 院内スタッフ 7 名
2018. 2. 22	第 5 回 サロンあうる 講義テーマ：進行の早い神経難病のケア (在宅スタッフ向け) 参加者：計 36 名 院内スタッフ 6 名+CL スタッフ 2 名

4. 研修会

月 日	参加者	名 称
2017. 5. 13 東 京	小林 陽子	ALS シンポジウム テーマ：他職種連携診療に向けて (東邦大学医学部内科学講座神経内科学分野)
2017. 5. 13	山間千佳子	中央 E 支部のつどい

札幌	河野 光香	(北海道医療ソーシャルワーカー協会)
2017. 5. 16 札幌	下川満智子 吉田 陽子 山間千佳子 中山 宰歌 河野 光香	事例を通して考える地域医療構想 ～地域医療構想と手稲区・西区の取り組み (札幌市医師会西区・手稲区支部、介護支援専門員 協会西区・手稲区支部、西区・手稲区在宅ケア連絡 会)
2017. 5. 20 札幌	河野 光香	2017 年度定期総会 ～ソーシャルワーカーとして働くということ (北海道医療ソーシャルワーカー協会)
2017. 6. 2～4 札幌	小林 陽子 山間千佳子 中山 宰歌 河野 光香	第 37 回日本医療社会事業学会 第 60 回北海道医療ソーシャルワーク学会 ～医療ソーシャルワークの枠組みを再考する
2017. 6. 9 札幌	河野 光香	第 7 回 planet 勉強会と交流会 「在宅医療と介護サービスの連携でできること・で きないこと」
2017. 6. 13 札幌	河野 光香	特集「西区における地域医療と地域包括ケア」 (西区ケア連絡会)
2017. 6. 16 札幌	下川満智子	平成 29 年度北海道看護協会看護師職能集会
2017. 6. 24 札幌	下川満智子 吉田 陽子	第 4 回パーキンソン病 医療フォーラム
2017. 7. 8 札幌	小林 陽子 山間千佳子 中山 宰歌 河野 光香	平成 29 年度 難病医療研修会 「神経難病患者の療養支援」 (北海道難病医療ネットワーク連絡協議会)
2017. 7. 8 札幌	下川満智子 吉田 陽子	北海道看護協会 札幌第 4 支部「医療安全研修会」 テーマ「病院・施設で生活する人々の医療安全」
2017. 7. 11 札幌	河野 光香	平成 29 年度在宅医療介護連携に係る啓発事業 他職種意見交換会 (西区在宅ケア 連絡会)
2017. 7. 15～16	下川満智子	第 22 回日本在宅ケア学会

札幌		「地域包括ケアにおけるセーフティ・マネジメント～人々と多職種の協働～」
2017.7.22 札幌	河野 光香	平成 29 年度 中央 E 支部事例検討会 (北海道医療ソーシャルワーカー協会)
2017.8.3 札幌	吉田 陽子 小林 陽子 河野 光香	「ALS 在宅支援勉強会 Part2ー当事者としての想いー」 (難病と地域ケア研究会)
2017.8.25～26 東京	下川満智子 吉田 陽子	第 22 回日本難病看護学会学術集会 テーマ「難病看護師の新たな展開ー居心地の良い暮らしのために」
2017.10.14 札幌	小林 陽子 吉田 陽子	札幌地域医療連携研究会キックオフセミナー 「2018 年度医療介護ダブル改定で現場はいったい何がどう変わるのか!」 (札幌地域医療連携研究会)
2017.1.13 札幌	下川満智子	平成 29 年度地域における看護職等の連携シンポジウム
2017.1.18 札幌	下川満智子 小林 陽子 河野 光香	第 24 回連絡会の連絡会 新年交流会 「広げよう地域ネットワークの輪」 (札幌市ケア連絡会)
H29 年 2 月 17 日 札幌	小林 陽子 河野 光香	平成 29 年度「神経・筋疾患」研修会 「筋ジストロフィーのマネジメント」 (国立病院機構北海道医療センター)
H30 年 3 月 4 日 札幌	河野 光香	「実践・研究報告会」 (北海道医療ソーシャルワーカー協会)
2017.3.10 札幌	近藤みずき	メディエーションマインドを学ぼう ～認識のズレを認識しよう！よりよい関係構築のために (独立行政法人地域医療機能推進機構)

5. 講義

月 日	参加者	名 称
2017. 4. 26	山間千佳子	北大医学生講義 ～MSW の役割 基礎と神経難病領域の実践から学ぶ
2017. 5. 10	中山 宰歌	北大医学生講義 ～MSW の役割 基礎と神経難病領域の実践から学ぶ
2017. 6. 14	木村 愛	北大医学生講義 ～MSW の役割 基礎と神経難病領域の実践から学ぶ
2017. 6. 21	河野 光香	北大医学生講義 ～MSW の役割 基礎と神経難病領域の実践から学ぶ
2017. 10. 25	下川満智子	天使大学看護学生講義 ～地域医療支援部の役割 について
2017. 10. 30	小林 陽子	平成 29 年度難病研修会 「パーキンソン病の患者様が利用できる可能性が ある制度について」 (札幌市西保健センター)
2017. 11. 1	下川満智子	天使大学看護学生講義 ～地域医療支援部の役割 について
2017. 11. 28	小林 陽子	武田製薬 研修会 「パーキンソン病の患者様の使える医療制度と療 養相談」

4. 北海道神経難病研究センター主催講演会

(1) 第6回北海道神経難病リハビリテーション研究会講演会

北海道神経難病リハビリテーション研究会は、神経難病に関する病態解明及び臨床的、学術的治療研究、コメディカルによる多角的臨床研究、神経難病に関わる医療環境調査・研究活動を目指す北海道神経年病研究センターの研究機関の1つです。神経難病に対するリハビリテーションの知識と技術の向上、神経難病リハビリテーションのエビデンスの構築、神経難病に関わるセラピストのネットワーク構築を目的として年1回講演会を開催しております。

平成29年12月17日(日)に西野学園札幌医学技術福祉歯科専門学校3階講堂で第6回北海道神経難病リハビリテーション研究会講演会を開催しました。参加者数は152名でした。講演会タイトルを「AAC導入と呼吸リハのアプローチが実践しやすくなる筋萎縮性側索硬化症のリハビリテーション」とし、講演では神経内科専門医の野中道夫先生(北祐会神経内科病院運動ニューロン疾患部門部長)から「筋萎縮性側索硬化症の医療において今できることは何か」というテーマで疾患の基礎知識から最新治療の考え方など広く講義して頂きました。演題1では作業療法士の河野純輝先生(北星記念病院)から「筋萎縮性側索硬化症患者の生活環境とニードにあわせたAAC選択」というテーマで事例をまじえてコミュニケーション機器の導入に必要な基礎知識から使用目的や使用する場所、介助者への情報提供、導入時期などについて講義して頂きました。演題2では理学療法士の寄本恵輔先生(国立精神・神経医療研究センター病院 身体リハビリテーション部主任)から「筋萎縮性側索硬化症の呼吸理学療法の効果 LIC TRAINERの開発」というテーマで、ALS患者における呼吸障害についての説明と適切な排痰ケア方法について講義して頂きました。寄本先生自信が開発されたLIC TRAINERを用いた呼吸リハ方法を学び、球麻痺症状の進行や気管切開により呼吸リハが実施しにくい患者に対する実施方法を学ぶことができました。

筋萎縮性側索硬化症は神経難病の中でも医療、介護の両面において対応の難しい疾患の1つと言え、医療と介護分野の連携とインフォーマルな支援の協働があつて社会生活が可能となります。今回、講演頂いた3演目はいずれもALS患者に対する医療、呼吸リハ、コミュニケーション支援に関する最新知識で、明日からの診療に役立つ内容だったと感じました。ALS患者のケアを実践していくためには多くの事を学ぶ必要があります。今後も医療、介護、福祉、行政、家族、ボランティアさん達が一堂に研鑽を積み、ALS患者が安心して生活できる社会を形成して行ければと考えます。

筋萎縮性側索硬化症の呼吸理学療法の効果—LIC TRAINER の開発—

国立精神・神経医療研究センター 身体リハビリテーション部 寄本 恵輔

ALS 患者における排痰ケアは COPD 等の閉塞性換気障害の流れを大きく受けてきたものの、そこから脱却し、疾患および病態特性を捉えた排痰ケアへのパラダイムシフトが必要である。ALS 患者における呼吸障害は、呼吸筋力の低下による拘束性換気障害であり、その結果、低換気となり、肺は虚脱している。そこに必要な排痰ケアは、虚脱している肺を陽圧でしっかりと広げ、有効な咳嗽力を維持することが重要である。

神経筋疾患のガイドラインには、呼吸管理の第一選択は NPPV とされ、徒手や器械的咳介助 (Mechanical insufflation-Exsufflation: MI-E) により気道クリアランスを保ち、肺や胸郭の可動性を維持するために行う最大強制吸気量 (Maximum Insufflation Capacity: MIC) 練習などの呼吸理学療法が推奨されている。このように閉塞性換気障害とは異なる排痰ケアがあることを神経難病に関わる療養支援者は認識し、排痰ケアを提供できるようにしなければならない。

<最大咳嗽流速 Cough peak flow: 健常成人 360~960 L/min(ジェット機並み)>

有効な咳 270l/min 以上 感冒時喀痰困難 240l/min 以下 喀痰困難 160l/min 以下

<Mechanical In-Exsufflator (機械的咳嗽)>

カフアシスト E70、コンフォートカフ、パルサー、ペガソ

排痰補助装置加算 1800 点

人工呼吸を行っている入院中の患者以外の神経筋疾患などの患者に対して、排痰補助装置を使用した場合に、第 1 款の所定点数に加算する。

<バックバルブマスク (アンビューバック) を用いた呼吸理学療法>

最大強制吸気流量 Maximum Insufflation Capacity (MIC) 練習

バックバルブマスクを利用し、強制的に 3~5 回程度、被検者が最大に耐えうる air stack (息止め) まで加圧し、そこから得られる呼気量を測定する。この air stack (息止め) を利用し、有効な咳が行えるようにトレーニングする。

一方向弁を用いた肺強制吸気量 Lung Insufflation Capacity (LIC) 練習

バックバルブマスクに一方向弁が付いており、被検者が耐えうる圧で送気された空気を吸気し、被検者の呼出する換気量である。我々は LIC TRAINER を開発した



寄本恵輔先生：「筋萎縮性側索硬化症の呼吸理学療法の効果-LIC TRAINER の開発-」をご講演



講演会会場



野中道夫先生 「筋萎縮性側索硬化症の医療において今できることは何か」をご講演



河野純輝先生「筋萎縮性側索硬化症患者の生活環境とニーズにあわせた AAC 選択」をご講演



講演会会場

第6回 北海道神経難病リハビリテーション研究会 講演会
**AAC導入と呼吸リハのアプローチが実践しやすくなる
筋萎縮性側索硬化症のリハビリテーション**

開催日 2017年12月17日(日)

申し込み不要
参加費：無料

開演 10:30~15:00(開場10:00)

会場 西野学園 札幌医学技術福祉歯科専門学校 3階講堂
住所/札幌市中央区南5条西11丁目1289-5
駐車場はありません。近隣の駐車場をご利用ください

定員 200名 **対象** リハビリテーション、医療、介護に
関わる職種および一般の方

基調講演：筋萎縮性側索硬化症の医療において今できることは何か
講演時間：10:30~11:40(質疑応答10分含む)

座長：森若 文雄 一般財団法人北海道神経難病研究センター センター長

講師：野中 道夫 先生(神経内科専門医) 北祐会神経内科病院 運動ニューロン疾患部門部長

演題 1：筋萎縮性側索硬化症患者の生活環境とニードに合わせたAAC選択
発表時間：12:40~13:40(質疑応答15分含む)

座長：小田柿 糸子 北祐会神経内科病院 言語聴覚士

演者：河野 純輝 先生(作業療法士) 医療法人社団高翔会 北星記念病院

演題 2：筋萎縮性側索硬化症の呼吸理学療法の効果 LIC TRAINERの開発
発表時間：13:40~14:40(質疑応答15分含む)

座長：中城 雄一 北海道神経難病リハビリテーション研究会 幹事代表

演者：寄本 恵輔 先生(理学療法士) 国立研究開発法人 国立精神・神経医療研究センター

主催：一般財団法人北海道神経難病研究センター

後援：札幌市、一般社団法人札幌市医師会、公益社団法人北海道看護協会、公益社団法人北海道理学療法士会、
公益社団法人北海道作業療法士会、一般社団法人北海道言語聴覚士会

問い合わせ 北海道神経難病リハビリテーション研究会(担当:中城) TEL:011-631-1161 FAX:011-631-1163
E-mail:y-nakashiro@hokuyukai-neurological-hosp.jp HP:http://www.hokkaido-find.jp

(2) 神経難病緩和医療研究会

神経難病緩和医療研究会は5年目をむかえ、20名を超える多職種による活動を継続している。

1. 参加者

今年も医師、看護、リハビリテーションセラピスト、総務、MSW と多職種のスタッフで構成した。

また今回講師として招聘したリハビリテーション科加藤氏と馬道氏は2018年度には正式委員として参加していただくことになった。

1-1 院外

高橋貴美子先生（札幌中央ファミリークリニック）（院外幹事）

伊志嶺志津子先生（札幌東訪問看護ステーション所長）

1-2 院内スタッフ

武井麻子、中城雄一、佐藤美和、本間早苗、野中道夫、渡邊香奈子、香川みのり、徳永典子、黒田清、小林陽子、小泉裕文、横山晴美、横澤利幸、矢野千里、濱田祥蔵、田澤 乾、加藤恵子（講師）、馬道健弘（講師）、磯西潤（広報）

2. テーマ

2017年度のテーマは「認知症」。

神経難病のみでなく、高齢化に伴う問題として、神経内科専門病院のスタッフとして多職種で検討した。

3. 活動内容

毎月1回第3金曜日に院内研究会を開催し、並行して以下の研究会 研修会を企画した。

3-1 院内研修会 研究会 北海道神経難病研究センター 4階 会議室

① 2017年6月16日

「神経疾患に伴う 認知症 精神症状のケア」武井

「精神症状と漢方」野中

今年度のテーマ認知症の周辺症状の説明、当院での対応困難例、漢方の使用方法などについて学んだ。

② 2017年8月18日

「心が動く作業療法～その構造戦略と戦術について」

講師：当院リハビリテーション部 加藤氏（2018年度は委員として参加）

高齢者の精神症状、周辺症状への介入原則、心の満足、タクテイルケアなどについての講義があり、活発なディスカッションによりパーソンセンタードケア

の概念について学ぶことができた。

③2017年9月29日

「認知症の理解とコミュニケーション」

講師:認知症看護認定看護師 伊志嶺志津子先生(札幌東訪問看護ステーション所長)
認知症患者とのコミュニケーションの取り方に関し、基本的な姿勢を実例から学んだ。

④2017年10月16日

「オピオイド使用症例報告」

札幌中央ファミリークリニック 高橋貴美子先生

オピオイドの使用症例のご経験に関する講義で、オピオイドの使用のコツを学んだ。

⑤2017年10月26日

「認知症サポーターキャラバン」サポーター養成講座

当院リハビリテーション部 馬道氏(2018年度は委員として参加)

多くの職員が参加し、認知症の方に接する基本的姿勢に関し学ぶ機会となった。

3-2 院外研究会

2018年3月10日 札幌医療リハビリ専門学校にて第5回神経難病緩和医療研究会研究会 講演会を開催した。本年度の院外研究会のプロジェクトチームは以下の6名
佐藤美和(NRs)、小林陽子(MSW)、加藤恵子(OT)、横澤利幸(総務)、濱田祥蔵(総務)

磯西潤(総務) 今回のテーマは認知症であり、2つの講演で構成した。

ひとつめは「優しさを伝えるケア技術 ユマニチュード」。ユマニチュード認定インストラクターの盛真知子氏により ユマニチュードの概念と「見る」「話す」「触れる」「立つ」という4つの具体的方法により患者との良好な関係を気づく技術を学んだ。

ふたつめは「認知症周辺症状に対する処方」。札幌中央ファミリークリニックの高橋貴美子先生により 認知症の患者さんの訴えのとらえ方から処方のコツまで奥深い洞察に満ちたお話を伺った。

アンケートでの満足度は高かったが、惜しむべくは院外での研究会のため当委員会以外の当院スタッフの多くがこの講義を聴くことができなかったことであり、次年度の課題となった。



院外研究会：【優しさを伝えるケア技術 ユマニチュード】当日は医療機関・施設・事業所さま100名以上が参加



第5回 神経難病緩和医療研究会 講演会

認知症ケアを考える

日時
平成30年**3月10日**(土)
開場 / 13時30分
開会 / 14時~16時40分

会場
札幌医療リハビリ専門学校
9階会議室
札幌市北区北6条西1丁目

入場無料
※駐車場なし。

車いす 座席あり
※車いすでご参加の方は、事前に事務局までご連絡をお願いします。

申し込み 不要
※定員200名
※満席の場合は入場をお断りする場合がございます。

講演 優しさを伝えるケア技術 **ユマニチュード**[®]
講師 **盛 真知子** 氏
ユマニチュード認定インストラクター
独立行政法人国立病院機構 東京医療センター
看護部在宅医療支援 地域医療連携係 看護部

ミニ講座 **認知症周辺症状に対する処方**
講師 **高橋 貴美子** 氏
札幌中央ファミリークリニック 院長

お問い合わせ先
神経難病緩和医療研究会事務局
武井・麻子
〒060-0808
011-631-1161 (代)
kanawa@hokkaido-fnd.jp
http://www.hokkaido-fnd.jp/kawaf/

主催 / 北海道神経難病研究センター 神経難病緩和医療研究会
協賛 / 札幌中央ファミリークリニック、静明園診療所、北協会神経内科病院、札幌パーキンソンMS神経内科クリニック
後援 / 札幌市、札幌市医師会、北海道医師会、北海道看護協会、北海道理学療法士会、北海道作業療法士会、北海道言語聴覚士会、北海道聴覚協会

第5回 神経難病緩和医療研究会 講演会

認知症ケアを考える

司会 / 加藤 恵子 北海道神経難病研究センター 神経難病緩和医療研究会
北協会神経内科病院 リハビリテーション部 作業療法科長

開会の挨拶 武井 麻子 北海道神経難病研究センター 神経難病緩和医療研究会代表
北協会神経内科病院 副院長
14:00~

講演 優しさを伝えるケア技術 ユマニチュード[®]
講師 / 盛 真知子 氏
ユマニチュード認定インストラクター
独立行政法人国立病院機構 東京医療センター
看護部在宅医療支援 地域医療連携係 看護部
14:05~15:30

座長 / 佐藤 美和 北海道神経難病研究センター 神経難病緩和医療研究会代表補佐
北協会神経内科病院 看護部長

休憩 (15分間)

ミニ講座 認知症周辺症状に対する処方
15:45~16:15
講師 / 高橋 貴美子 氏 札幌中央ファミリークリニック 院長
座長 / 武井 麻子 氏 北海道神経難病研究センター 神経難病緩和医療研究会代表
北協会神経内科病院 副院長

閉会 16:30

講演 優しさを伝えるケア技術 ユマニチュード[®]
盛 真知子 氏
フランス精神のケアの手法で、①見る、②触る、③触れる、④口づ、の4つのコミュニケーション技術を基本としています。このユマニチュードの考え方は「人としての尊厳」を前提とし、「人間は人とのかわりがあつて初めて人間になれる」という、人間関係を築くうえで最も大切にしたい考え方を基盤としています。

ミニ講座 認知症周辺症状に対する処方
高橋 貴美子 氏
「寝不眠と取り替わってこない」、「さつき転倒した」、「突然の発作を繰り返す」、「興奮して声をあげる」、「夜でも起きる」、「閉居したままをあげる」、これらの困った症状にまず非薬物的介入をします。その際ユマニチュードは大切なケアです。常に態度を傾け、薬が必要と判断し少量を慎重に使用します。効果があっても朝も早い起床で過ごしているようにはしていません。

【® HUMAN TOUCH 及びユマニチュードの名称及びそのロゴ、日本及びその国における商標。A.S. Human Touch 社の権利または登録商標です。】

アンケートは一部抜粋

2018/03/10 第5回神経難病緩和医療研究会講演会「認知症ケアを考える」

性別	年齢	職業	知ったきっかけ	参加動機	ユマニチュードについて	内容について	今後聞きたい講演や感想など	
1	女	20-39	医療関係者	ポスター・チラシ	元々興味があったから	知っていた	とても満足	医療に携わっています。人と人との関係を忘れずにユマニチュードの考えを取り入れていきたいと思っています。
2	女	20-39		ポスター・チラシ	元々興味があったから	知っていた	とても満足	映像も説明もとてもわかりやすく、参加できてよかったです。実際に行えるまでは課題も多いですが今後もユマニチュードについて学び続けたいです。
3	女	60-69	一般(その他)	人から聞いた	元々興味があったから	知らなかった	とても満足	家族が認知症になったら在宅でケアしてあげようと思いました。
4	女	20-39	医療関係者	ポスター・チラシ	ポスター・チラシを見て	知らなかった	まあまあ満足	ALSの看護。在宅呼吸管理について (BIPAP、レスビなど)
5	女	20-39	医療系学生	人から聞いた	元々興味があったから人に誘われたから	言葉は聞いたことがあった	とても満足	講演の中で患者さんに対して「してあげる」ではなく「さしあげる」という言葉を使っていて、患者さんへの尊厳の気持ちを感じられた。ユマニチュードには興味があり、本当に良かった。資料が手元にあると嬉しかった。処方に関してはよくわからないが、他の診療科から処方される薬にまで目を向けるというには、そうだなと気がかされた。
6	女	20-39	医療関係者	ホームページ	元々興味があったから	知っていた	とても満足	ずっと興味があったユマニチュードのケアについて講演が開けて大変勉強になりました。具体的にお話いただいたので、現場に戻り実践していきたいです。(資料がなかったのが残念でした)
7	女	20-39	医療関係者	ポスター・チラシ	元々興味があったから	知っていた	とても満足	去年ユマニチュードの本を購入しました。本だけでは理解しにくいことが今日の講演で少しわかったような気がします。「時間」「業務」にとらわれることなく認知症をもっている人との関わる時間、その人らしく生きていく時間を大切にするためユマニチュードの技法を取り入れていきたいと思っています。また参加させて頂きます。老健は介護が主体のため、力づくでのケアや利用者の思いを無視したケアなどをよく見ます。特に認知症状の悪化した人によく向精神薬を使っていたこともよくあります。その人のためにどうしたら良くなるか考えることも少ないため、ユマニチュードのケアを日常業務の中でちよっとずつ知ってもらいたいです。安心したケアを提供できるように自分なりに努力をしようと思っています。興味深い講演会でよかったです。